

情念と自我

——フランス十七世紀における情念分析論と心理小説との接点——

萩原茂久

I 二相の作品構造

(17) 情念と自我

スタンダールの『バルムの僧院』はやはり傑作にふさわしい複合性を示している。ワテルローの戦いに中心をもつ叙事詩的性格、ファブリスが官憲に追跡されての逃走とか、殺人とか、捕えられて監禁された城塞からの脱走とかに感じられる冒険・推理小説的性格、サンセヴェリナ夫人とファブリスとの愛情関係に見られるフロイト的性格など、多くの興味あるものが見られるが、私がいま注目したいのはモスカ伯爵とサンセヴェリナ夫人とが、ラヴェルシー派をむこうにまわして虚虚实実のかけひきに精力を使いはたす、バルム公国宮廷での闘争の物語り

である。このたたかいはサンセヴェリナ夫人が王エルネスト四世を毒殺という手段によって除くことで、その頂点に達する。

さて、脚色によってロマネスク化されたこの野心と陰謀の宮廷記録を読んだ眼でラ・ファイエット夫人の『クレヴの奥方』を読むと、そこに前者の原型かとさえ思われる、やはり野心と陰謀の宮廷記録を見いだしておどろくのだ。しかも作者はこの宮廷記録になみなみならぬ努力を投入し、この小説の本すじであるクレヴ夫人とヌムール公との心理的恋愛劇にほぼ匹敵する分量をついやしている。

フランス文学史上には、厳密な証明を経ないとしても

少なくとも実感的に心理分析小説の系譜が存在するが、たとえルネ・ラルウがその評論『デカルトからブルウストへ』⁽¹⁾のなかでこの系譜にわざわざ入れている十九世紀のバンジャマン・コンスタンの『アドルフ』では、『クレージュの奥方』の装置や衣裳をとり去り、俳優もきわめて少数にしぼって脚本とその演技だけに力点をおく一種の演劇革新運動にも似た努力があったと見ることができると。すなわち『アドルフ』の方では環境は間接的な影となり、恋愛心理劇は構成的により純化したといえるのである。また二十世紀の早熟な作家レモン・ラディゲはやはり純粋な作品『ドルジェル伯の舞踏会』を構成し、『社交界』方面。ある種の感情の展開に有利なふんいき、だが社交界を描くためではない。ブルウストとはちがう。背景は重要ではない」と述べた。⁽²⁾ブルウストに對抗してラ・ファイエット夫人以来の伝統の純血性にそむくまいとしたラディゲが、ある意味ではラ・ファイエット夫人自身に反逆している。つまり『クレージュの奥方』は構成的に純粋ではないのである。

背景、あるいは環境描写（もちろんこれは十九世紀的な環境描写とは質的にちがう）——さらにラ・ファイエ

ット夫人においていいかえれば「宮廷記録」は、歴史とか記録を利用するすべての小説作品と同じように、きわめて当然な役割りももっている。政治的・外交的事件や行事が、主人公たちを時間的・空間的に移動させたり束縛したりすることによって、小説の本すじが展開すること。そういうものがたとえ男女を出会わせたり、はなれさせたりすることである。このような意味での環境はいわば「舞台まわし」の一種に似た役割りであって、小説には必要なものではあるけれども、必ずしも作品の質を高めたり、その思想的内容を支配するものとはいえない。

『クレージュの奥方』における「記録」——宮廷集団で構成される環境の描写は、「小説」——心理のドラマと対等であるとさえいえる。この二つは作品においてゆるぎなく、そこに集中化と純粋化の高度な作品から見ればやや不整合な構造が形づくられることになった。

しかしながら一読するかぎりでは、ゆるぎの接合面は巧妙にかくされ、それはちょうど心理学書に出ている図柄と素地との関係を示す図を見るようだとはいえる。黒地に花びんのような形が白く染めぬかれていて、その図をじっと見ていると、最初は黒い背景のなかに白い花びんが浮

きだして見えるが、ある瞬間、その素地と図柄との関係がとつじよ転換して、闇のなかから花びん型の穴のむこうに白い空間がひろがっているように見えてくる。前景と背景との関係がいつのまにか逆転して、背景が前景になり、前景が背景になるということ。こういう錯視ともいふべき現象さえこの作品を読んでいておこるのである。

作者自身による記述と、それに作中に挿入された登場人物による過去の記述、さらには作者自身がするこの物語りの終わる時点以後の、すなわち未来の運命を暗示する記述までも含めるならば、あの激動の十六世紀の約五十年にわたる歴史がここにあるといってもよいだろう。さらにはイギリス、スペインにまで展望する眼はとどくということになれば、時間的にはかりでなく空間的にもこの年代記はひろがって行く。この、宮廷・社交界だけに限られ、人的要素だけで構成された環境——宮廷集団の記録は、作品の第一部においてほとんど小説をおしのけ、主人公たちはむしろ背景のなかに埋没している、といってもいいすぎではない。第二部・第三部では記録そのものはやや背景に退くが、クレイヴ公の友人「サンセルの恋愛事件」、「テミーヌ夫人の手紙事件」など、主

要登場人物に直接関係がないか、または関係がないとはいえないが心理分析小説の本すじには関係のない事件が述べられる。主要人物たちが完全に前景に踊り出るのは第三部の後半からで、第四部になって心理のドラマは多く直接的に正面から描かれ、白熱する。すなわちその辺では小説が図柄となり、記録は素地となるのである。

II 情念の受動性

『クレイヴの奥方』におけるこの構造の二相性について、むしろ小説形式の問題としてそれを説明しようとしているのではない。この作品の歴史的色彩について探究したシャマールらの研究⁽³⁾をはじめとして、このような作品構造をもたらしただ外的原因を探るための資料はかす多くはないがすでに存在し、そこに考察の意義はそれほど大きく残ってはいない。私が解明しようとするのは、そのような作品構造を投射し同時に受容するに至った作者の内なる魂でなければならず、それは作者の構成的な面における選択と、いくつかの偶然事のかさなり合いによって一つの作品ができあがるといった過程の問題からは遠くはなれたところに存在するのである。

ラ・ファイエット夫人が『クレヴの奥方』で分析し、描こうとしたのは恋愛であるのはもちろんだが、それは「情念」のうちで主要な位置を占め、他の情念——嫉妬、希望、不安、疑い、喜び、苦惱、悲しみなどのなか、だちともなりうる。恋愛という情念そのものが複合的あるいは段階的であるうえに、付随的な情念や反対的な情念をもなうのである。ところでこの時代には情念に關し比較的系統立った論文としてデカルトの『魂の情念』という著作がすでに存在した。ルネ・ラルウは前出の評論において、分析も証明もはぶいた性急な書きかたで『魂の情念』に補足されたデカルトの『方法叙説』こそ最初の偉大な心理小説だと書いたが、後者はひとまずおくとして、当時の代表的な、比較的系統立ちまとまりのある論文『魂の情念』が同時代の教養人士たちに影響を与えたのは当然であろう。

この論文は血液や精気の動き、松果腺の働きなど、いわゆる心理生理学的叙述が念入りにおこなわれている点、情念をどのようにして制御するかという倫理的色彩が強くうち出されている点に特色があり、その真の価値を認識するにはそれらの色彩を除こうとつとめながら読む必

要がある。デカルトによれば「情念」(Passion)とは、「知覚」(Perception)「感情」(Sentiment)「情緒」(Emotion)であり、精気のある動きによりひきおこされ、維持され、強化されるもの、と定義される。「知覚」とは魂による意志の働らきでもなく、明証的な認識でもないような思念であり、「感情」とは外部感覚がとらえる対象と同じように魂によって感受されるものであり、「情緒」とは魂をつよく揺りうごかす思念である。⁽⁸⁾ デカルトはさらにつけ加えて、こういう情念が魂に關係することを強調する。それは香り・音・色などの外界の事物の知覚、飢え・喝き・苦痛などの肉体的感覚、食欲などの身体的欲求の全思念から、この思念を區別するためである。⁽⁹⁾

しかし「情念」についてのもっとも重要な点は、その「受動性」ないし「受容性」であり、これに反して(魂の)「意志」は「内発性」、「能動性」を特徴とする。すなわち「情念」は「意志」の前段階あるいは下位の段階にしか存在できないものである。

デカルトは魂と肉体、精神とからだという二元性の観点をたもって崩さないから、肉体についての知覚があり、

魂についての知覚がある。そして、魂あるいは精神に関して「知覚」という語が使用されるとき、この語はデカルトの考えかたに適合し、思いのほか重要な意味を含むであろう。つまり知覚(情念)には「対象」が存在するのだ。いや、対象がさき存在するのだ、というべきかもしれない。彼が情念のまず最初に「おどろき」(Admiraton)を配置しなければならなかったことはこれを雄弁にものがたっている。ガーディナーによれば、デカルトが「おどろき」を情念の、しかも六つの本源的情念(他の五つは愛、憎しみ、欲望、喜び、悲しみ)のなかに入れたことは大胆にも伝統に反逆したことであり、スコラ学派は終始これを情念ではなく知的行為とみなしていた。⁽¹²⁾ある対象との最初の出会いにおいて、それが新しいと判断されるか、あるいは以前知ったものとはひどくちがうか、想像していたものとは非常にことなると判断されたとき、人間は「おどろき」を感じる。「この対象が自分にとって有利であるのか、それとも有利でないのか、少しも認識できないうちに」⁽¹³⁾おこってしまうことであるゆえに、彼はこれを全情念の最初の位置に据えねばならなかったが、このことにより情念が「対象」という

外的原因をもつ、「受動性」ゆたかな思念でなければならぬことが無言のうちにも強調されたといえるであろう。

III 「記録」における情念

デカルトの論文にくらべれば、なんら系統立った論の進めかたはしていないが、ときおり観察力のひらめきによって読む者を啓発する小論がある。それは『愛の情念に関する論文』という題名をもつ小論であり、パスカルの著作といちおうされるが、有力な証明もなければまた反証もない。一部の批評家たちはパスカルが一六五二年か五三年ころこれを書いたであろうと推定しているが、⁽¹⁴⁾大事な点はたとえこれがパスカルの手になったものでなかろうとも、この作品に見いだされる思想や表現のしかたが、当時の影響力ある思想家やモラリストたち——すなわちパスカル自身やラ・ロシュフーコオ、メレらの作品にも見られることである。十七世紀の後半に活躍舞台をもったこれらのひとびとに、共通して承認されうるような思想がある程度以上この論文には盛られていたというなによりの証拠であろう。

この小論の根幹となる部分は愛のさまざまな様相を分析しているが、序ともいえる部分では人生における二大情念として「愛」(Amour)と「野心」(Ambition)とをあげ、「人生が愛に始まり野心に終わるなら、それはなんと幸福であろう！」と声を高めて賛美している。この二大情念の組み合わせは、実はラ・ファイエット夫人が『クレージュの奥方』にもちこんだ「宮廷記録」のなかに、少しちがった形で現われる。

「野心と色ごと」がこの宮廷の中心なのであって、それは男の心をも女の心をもひとしく占めていたのである(第一部)

ここに訳した「色ごと」という語は多少の問題をはらむが、原語 Galanterie の意味把握はラ・ロシュフーコーの作品『箴言集』のなかの一つ、

「galanterie においてもっとも少ししか存在しないもの、それは愛である」⁽¹⁷⁾

によっておこなった。この語が用いられた箴言はほかにもあるが、これほど単的に「愛」と対立してみずからをくっきりと現わしたものは見あたらない。

「愛」と「野心」という賛美的情念が、情念分析論の

場から個別性をもった歴史的・社会的場に移し植えられて「野心」と「色ごと」というふうになんかを変えたとしても、ラ・ファイエット夫人は必ずしも宮廷社会を断罪しているわけではない。パスカルが、「もっとも人間の意にかなない、多くの他の情念を包含する情念こそ、愛と野心である」(『愛の情念に関する論文』)といい、「人間はときおり情念によって揺りうごかされる必要がある」と別の個所でつけ加えるとき、ラ・ファイエット夫人は「野心」と「色ごと」についての前出の文につづけてつぎのように書く。

「……いろいろな利害関係があり党派があり、そこにはさらに婦人たちが一枚加わっていたから、恋愛はいつも政治問題にからみ、政治問題は恋愛にいきまじるといいうわけであった。だれもが平静ではいられなかった。無関心ではいられなかった。ひとびとは出世しようとか、気に入られようとか、役に立とうとか、いやじゃましてやれとかと考えていた。だれもみな退屈だったり、ひまだったりする者はなく、いつも快楽か陰謀に熱中していた」

まさに宮廷集団を構成するひとびとは情念によって揺

りうごがされ、平静ではいられないとしても、人生に遇
屈することなく、むしろ生き生きと生きていたのであり、
「この宮廷には一種の混乱なき波らんがあつて、それが
この世界をはなれおもしろいものにしていた……」
(第一部) といつてもよいほどであつた。ラ・ファイエ
ット夫人は十六世紀のアンリ二世の宮廷を題材としつ
つも、そこに描きだしたものはまぎれもない当時のルイ十
四世の宮廷であつたが、記録作家の眼はこの宮廷世界を
一つの対象として、新鮮なおどろきの眼さえもつて眺め
る。ここにある距離はいわば人生のはかなさ・無常観を
もつて観照するための条件ではない。その距離はまた、
自己を客観化するためのものでもない。というのはこの
対象に作者はなんら主体的にかがわつておらず、したが
つてそこに客観化すべき自己は見いだせないからである。
対象とのその距離は、事物に主体的にかがわることなく、
精神の受容性に身をゆだねつつ動かない姿勢を保証する。
それは反覆する印象や経験ではなく、むしろ新しい印象
や経験である。というのは反覆するそれらは視点を倦怠
させ、対象は視界のくもりのなかに埋没し、あるいは一
面にある色彩を帯びて見えるであろう。

ラ・ファイエット夫人がつぎからつぎへとあきること
なく、五十名以上にものぼる宮廷人たちを登場させるこ
とができたのは、それがドラマにおいてではなく「記
録」においてであつただけに、——いいかえれば主体の
熱いかわりがない場においてであつただけに、その対
象となるひとや事件が新鮮で好奇心をそそる——つまり
情念における「おどろき」を与えるものであつたからだ
といわなければならない。

主体がかかわることなく、受動的ないし受容的姿勢を
たもちつつ、距離をおいて作者が対象を眺めつづけてい
るあいだは、作品『クレヴの奥方』は「記録」の相を
はなれることはできなかった。しかもこの「宮廷記録」
の展開はそれ自身回転する力感をいやおうなしに感じさ
せるふしぎな効果をもっている。中心には王アンリ二世
とヴァランティノワ夫人、および王妃カトリーヌ・ドゥ
メデイシスとで形づくられる三角形があり、それをめぐ
つて無数の、それより小さい相似三角形が表面に浮きあ
がつてきてはうずまき。この中心三角形は全篇の象徴的
位置を占め、並列的ではなく観念連合的につぎつぎに
紹介される宮廷人たちは、個別的顔立ちはほとんどもつ

ことなく、ただ名という一種の記号をもつまのなかの一粒子として、宮廷という特殊社会の人間集団のうずまく巨大なうずまきのなかに呑みこまれてしまう。だから心理ドラマは始まろうとしても始まらないのである。

第一部におけるクレイヴ夫人の前身シャルトル嬢の登場も、また全篇を通じてその恋の相手がたとなるヌムール公の登場も、政治・外交・恋愛・武技・美貌・才知などの諸相における敵対関係・競争関係や、また血縁関係・友人関係・婚姻関係を橋わたしにしての人間たちの集合離散のうずまきのなかに没し、「小説」は始まろうとして始まらない。ただ、無数のうずまきが反撥しあい、触れあい、含みあって行くうちに二・三の党派がわりあいはっきり姿を現わしてくる局面において、父の死によって行動が自由となった(婚姻が政略にしばらくなくなつた)クレイヴ公だけはこのうずまきの外に出ることができ、党派のいがみあいやその他の政略条件にわざわざいざされてだれも食指を動かすことができなくなつていたシャルトル嬢に求婚し、結婚の意思を達する。しかしこれも「小説」だったろうか? そうではなく、「記録」のなかの一つの事件——習俗的で儀礼的で、作者が主体的に

かかわらない、はなれた世界の事件であった。

IV 「記録」にはめこまれた「小説」 における情念

第一部ではほとんど背景に退いていた「小説」は、第二部ではやや前面に出てくる。これらの「記録」にはめこまれた「小説」といったらよい部分で眼につくのは、作中人物、とくにクレイヴ夫人の環境世界に対する関係である。もちろんこれはその母親シャルトル夫人をなかだちとしての関係をも含む。娘の結婚まえはもちろんのこととして、結婚後もこういう世界に未経験な娘を放り出すことに、シャルトル夫人は非常に悩んだ。とりわけ結婚後の娘がヌムール公を恋しはじめたことを見やぶつたこの母親は、いっそう不安に心をかき乱されるが、ちょうどその折り病気が重くなつてきた。シャルトル夫人はクレイヴ夫人に遺言として訓戒をのこすのである。

「ああいう場所では、うわべだけ見て判断していたら大へんなことになりますよ。眼に見えることと真実とはほとんど逆なのだからね」(第一部)

夫人は娘に、自分が知っている過去の宮廷のことをも

のがたる。高貴な男性がいく人かの女性を愛すると、その女性どうしのあいだにはげしい情念が燃えあがり、勝利をえた方の女性が相手やその周囲に党派をつくるひとびとを虐待し、追いおとしてしまう。ところが高貴な男性の死によって寵を受けた女性も力を失ない、やはりべつの高貴な男性との関係で浮かびあがってきた以前のライヴァルが残酷なまでに復讐をおこなうのである。こういう世界での恋愛は非常に危険であった。

この宮廷という環境世界——そのうずまく情念の「記録」は、作中人物クレヴ夫人にとって内的な経験とはいえまいが、少なくとも外的な経験である。彼女はその見、きき、受容するし、またそうしなければならぬ。経験の浅いクレヴ夫人がそれを批判したり、抵抗したりすることはない。ヌムール公という恋愛対象が彼女の魂に受動的に印象されたように、それらもまた同じようには印象される。

第二部における「サンセールの恋愛事件」と、第二部から第三部にかけての「テミーヌ夫人の手紙事件」は、単に小説技術上の観点からすれば、当時からいわれているようにディグレッションではある。しかし私の考え

では作者の姿勢においては必然的なものであった。この二つの部分は「心理ドラマ」を意味する「小説」とは異質の「小説」であり、ロマネスクな小説だといってもよいであろう。「テミーヌ夫人の手紙事件」の方ではクレヴ夫人はかなりかわりあいがあるとはいっても、この二つの事件は本質的には同種のものであり、「記録」ではなからうが「記録」に準じている。つまり——後者の事件では作者が多少主人公をそれにかかわらせようとしたとはいっても——主人公にとってはやはり外的な事件なのであり、いいかえればそれらは新しい印象と経験であった。

「サンセールの恋愛事件」はサンセールの友人クレヴ公によってクレヴ夫人に語られる形であるが、その内容を手みじかに述べると、サンセールの相手トゥールノン夫人はしばらくまえに夫に死なれたのちは、長らく悲しみに沈んだようすで世捨てびとのような厳格な生活を送っていた。そしてもう再婚はしないとまで宣言した。サンセールは夫人を心底から愛したので、彼女の方も心が動いてついに結婚の約束を与えるまでになった。ところが、トゥールノン夫人が自分の方からほんとうの愛を

傾けていたのはエストットヴィルで、彼女は彼にも同時に結婚の約束をしていたことが夫人の急死後判明したのである。

また、「テミーヌ夫人の手紙事件」はきわめて筋が錯雑しているが、それをできるかぎり要約して述べると、クレイヴ夫人の伯父シャルトル管区防衛官は球戯試合の最中にテミーヌ夫人の手紙を落とし、それが王太子妃の手にはいり、彼女がその女官クレイヴ夫人に読ませるために貸す。この手紙のことを知った王妃がシャルトル管区防衛官の紛失したものだとのうわさをきいて非常な関心を示し、王太子妃にこちらに早くわたすよういく度も使いを出す。いっぽう管区防衛官は自分を愛している王妃が、彼女からテミーヌ夫人に心を変えたことを知っては、自分の政治的地位が危うくなるのを心配し、ヌムール公に落し主の身を頼む。ヌムール公は防衛官の苦衷を思いやり、相手は自分の愛するクレイヴ夫人の肉親でもあるところからそれを引きうけ、クレイヴ夫人のところへその手紙を王太子妃からとり返してもらうことを頼みに行く。彼女がちょうどそのとき手紙をもっていたのでふたりは共謀して手紙をかくす。王妃からの強請

に困りはてた王太子妃にクレイヴ夫人は、あの手紙はクレイヴ公にわたしたところ、その落し主であるヌムール公がもって行ってしまったとうそをつく。そして王太子妃の願いで、ヌムール公とふたりしてクレイヴ夫人は、できるかぎりもとの筆蹟と文体に近い、にせの手紙をつくってさし出したが、王妃はかたんにこれをうその手紙と見やぶる、というのである。

「サンセールの恋愛事件」はクレイヴ夫人にとってまったくの外的事件だから問題はないが、「テミーヌ夫人の手紙事件」は彼女における心理のドラマにかかわりがある。が、そのかわらせかたにはあまりに偶然性を利用して作者の気組みが感じられすぎる点もあって、「記録」(あるいはそれに準ずる挿話)と「小説」のゆ着にこの作品としてはもっともあらわでみにくい跡を残したといえよう。だから「テミーヌ夫人の手紙事件」もクレイヴ夫人にとっての外的事件として意義があり、本質的には「サンセールの恋愛事件」と同じ構造上の次元を獲得しているといわなければならない。

これら二つの事件は外的事件としてクレイヴ夫人に働かさかける。これらの対象はそれぞれことなるものであ

り、彼女のこれらに対する小説技術的關係も少しばかりちがうとはいふものの、まさに同じ効果を与えうみだす同種の対象である。つまりそれらの対象は効果として、クレイヴ夫人の情念に対して抑制をうながすというふう

に働らいている。
もう少し以前にも、宮廷の諸事件や種種相が直接、というよりはむしろ母親の思念をとおして外部の対象としてクレイヴ夫人に与えられた。そして今度は間接というよりはむしろ直接ではあるが、しかし一定の距離をおいた外的事件としてクレイヴ夫人の印象や経験のなかにはいりこんできている。彼女はまったくこれらの対象に主体的にはかかわっていない。

クレイヴ夫人の母親シャルトル夫人は、恋愛が政治とからんでくるのを見て危険と断じ娘をそれから遠ざけようとするが、その時点でクレイヴ夫人が事態を深刻にうけとるといはずがない。しかしいくつかの場面を経てヌムール公への思慕をみずからに確認した彼女が、恋愛がいつわりに満ち、危険な恥ずべきものでさえあるという実例を偶然的外的事件によって教えられたとき、自分の身に思いあたるのは当然であろう。

実際の効果は別として、これらの印象や経験が情念に対して抑制をうながす場合、精神内のメカニズムはどのようなのであるのか？ デカルトは上述のように、魂が主体となり原因となって力動的におこる働らきを「意志」と呼び、受動的な情念に対して後段階的・上位次元的な位置を与えた。この意志の「内発性」あるいは「能動性」は、彼流の精神とからだの二元性にもとづく樂觀主義的な見解に属している。ときおりは「理性」ということばにもいいかえられる「意志」は、この単純で明快な対立図式のなかでどのくらいの力を発揮するものだろうか？

情念の制御の問題はデカルトの論文『魂の情念』における一つの柱ではあるが、情念はわるいものではなく、その性質上すべてよいものだといっている。⁽¹⁸⁾ そしてそれは魂が肉体とのあいだで共通にもつことのできる、すべての快樂・幸福・利益の原因となる。ただ情念の過剰はこれを制御しなければならぬのである。

クレイヴ夫人においては、はたしてこれまでの段階で情念が過剰であったかどうかは疑問であるし、先入観的だといってもいいくらいに受動的な姿勢をもって抑制を

始めるが、その情念は真に過剰ではなかったにしろ、彼女にとってはそれだけでじゅうぶんだったのである。

情念を抑制するためのいわゆる意志は、クレイヴ夫人においては俗的な徳、世間的な名誉や評判を通じて確立される徳——高い目標をもった倫理的なものではなく、むしろ快樂原理のうえに立つ美徳、あるいは夫婦のあいだの義務である。この種のものでだけの力をもつか疑わしい。これらはまたそのままの形ではなく、後悔とか苛責という情念の形でやってくることもある。このような、時に関して過去を向いている情念は反対情念としては弱いものであって、これによってほんとうの自己嫌悪がもたらされはしない。

いわゆるコルネイユ的な、情念と意志との単純で力づよい対立がこの場合成立しないのは、このような次元においてドラマがなく、したがって主体からのかがわり——その内発性も能動性もないからであり、視点と対象とのあいだにある距離のためといわなければならない。つまり、「記録」や「記録にはめこまれた小説」ではそのような精神の白熱はおこりようがないのだ。

V 「小説」すなわち心理の

ドラマにおける情念

「小説」はその第二段階から始まる。第一段階は今まで述べたように、クレイヴ夫人がヌムール公への愛を発見するが、抑制しようとする。それは俗世的倫理の代表者である母親シャルトル夫人の遺言や、「サンセールの恋愛事件」や「テミーヌ夫人の手紙事件」の一部の相に見られた事実を教訓とし、いわば俗世的・形式主義的義務感や美徳からであったので、真の情熱がほとぼしるのをどうすることもできない。——つまりここで第一階段が終わり、第二段階にはいるのである。

心理のドラマは主要な三人の登場人物のあいだにおこなわれる。クレイヴ夫人を中心にして、夫のクレイヴ公、恋びとのヌムール公が対置されているが、愛の悲劇性が高まるためには夫の愛は分析できず批判できない、一種神聖な立ち場におしあげる必要があった。それが高潔な愛であればあるほど、他の男を情熱的に愛さずにいられないのはますます悲劇であった。

この一種神聖な立ち場はクレイヴ夫人によって、たぶ

心に自由選択的な状況において支えとされ、彼女は他の男への愛を夫に告白してしまふ。夫はげしい嫉妬のとりことなつて行き、妻の相手がヌムール公だと知つたのち、部下にふたりのようすを探らせ、誤解可能な場面でふたりの関係がまぎれもないものだといふことを確信したとき、病いに落ちいり、数日後に死んで行く。

これに対してヌムール公は、宮廷随一の美男で女性たちのあこがれの的であり、現にいく人かの女性と交渉をもっているし、イギリス女王エリザベスでさえ彼となら喜んで結婚する可能性がある、まさに社交界的な男であつた。クレイヴ夫人はヌムール公の浮薄さを、たぶんに観念的にはあつたがよく認識してゐた。しかしクレイヴ夫人を知るようになってから彼はつぎのようになる。

「大きな悲しみとはげしい情熱とは、ひとの心に大きな変化をもたらすものです」(第一部)

「女のひとたちは自分たちに対する男の情熱を、機嫌のとるかたとか、求愛のしかたとかで判断するものです。そんなことは、相手になる女性が少しでも愛らしいひとたちなら、男にとってむずかしいことではないので

す。むしろむずかしいのは、女性のあとを追いかけたい誘惑にさからうことです。自分の気持ち世間に、いや当の女性たちにも見られることを気づかして、そのひとを避けることです。それよりもさらによく、ほんとうの恋しさを証拠立てるのは、自分が以前とは正反対になることです。一生快楽や野心に没頭してゐた者が、もうそのいづれをもたなくなることです」(同)

ヌムール公がどれほど恋愛において浮薄だつたとはいへ、クレイヴ夫人に対するようになってからはその内部で大きな変化がおこり、生への対処のしかたが変わつた。少なくとも変わったように見える。前述のことばも誇張ではなく、彼はエリザベス女王との結婚によりイギリス王になろうという熱い野心をも放棄し、クレイヴ夫人への恋がかなうためなら地位もなにもかもいらぬといふまでになつて行く。ここに野心と愛という二大情念のたがひがあるが、パスカルはこれらの情念が人生において賛美されるべき情念であるとしても、やはり継時的な情念であり、それらの同時存在については否定的である。すなわち、どんなに精神的なひろがりをもつていても、ひととは一つの大きな情念しかもてないのであり、もし二

つの情念がいっしょになると、その一つ一つは、それが一つだけしか存在しない場合の半分の大きさに減じてしまふ。

本人の意識の面上では、「快樂」(すなわち「色ごと」と「野心」)のかわりに「恋愛」が登場してきてそれらにとつて代わるが、さらにもう一步つきつめて表現すれば「野心」と「愛」とがたたかひ、後者が——たとえ長い眼から見れば一時的な現象でありうるとしても——勝利するということの意義は、この作品においては見すごすことのできないものとなる。外的な対象からある距離をおいて受容される新しい印象や経験からひきおこされ、維持され、強化される情念というものが、外見的に分けられた二つの種類のあいだでたたかひ、しりぞけあうこととはよやく白熱するということ。ここから、情念を意志または理性によつて抑制するのはことなる次元が始まる。もちろん情念を意志が抑制するといっても、意志が直接に抑制力を働かせるといふ場合だけではなく、意志あるいは理性が、その情念をおさえるのに有効な反対情念あるいは上位的な情念を意識的に発生・増大させて抑制する場合もある。また情念は浮動性がつよく、時間

の経過に対して抵抗力が弱いという特性により、時間がそれをしずめるまで急はらしかなにかの方法で引きのばす場合もある⁽²⁰⁾。しかしとにかく、そこには意志の働らきを欠くことはできないのである。

デカルトによれば、魂に関して意志だけでも発動力があり、それだけで純粋な喜びをもつことができる⁽²¹⁾が、しかし全生活的に情念とかわるときはそれに対して抑制的な立ち場に立つようになる。意志が情念を自由に制御し操縦できる人間が望まれるがそれはたぶん理念的な人間像であつて、情念はその規制から身をふりもぎり独走する。こうして意志や理性は情念に対して受動的な場は立ちやすく、しばしば立ちおくれ、後手にまわらないわけにはいかない。

ヌムール公とクレイヴ公というふたりの主人公の心理のドラマは、それぞれ恋愛についての苦悩と歓喜、嫉妬と焦慮と悲嘆を主題として展開するが、最後に前者は「時」と「会わずにいること」⁽²²⁾とがその情念を消し、後者については、苦悩と悲嘆のきわみに「死」がやってくる。しかしなんといつても男主人公たちの情念は多少図式的にとり扱われている点は否定できない。それに反し

でもっともよく書きこまれ、追求されているのは女主人公のクレイヴ夫人であって、その心理分析の軌跡はいく多の示唆を投げかける。

彼女は全篇にわたって、その情念に対してつねになんらかの抑制物をもつという宿命を負わされているように見える。外見的・俗世的な理性ともいふべき、美德や義務感が情念をおさえられるものではないと知ったであろう彼女が、自分の魂の内部におけるべき段階の模索と努力とを放棄して、この抑制物を外部に求め、夫にヌムール公への恋愛を「告白」してしまう。しかもこれが心弱い女性の心情から出たものでないことは、夫の詰問におどろいた彼女が、真実を述べたことに対する感謝をすら要求する——その誇り高い態度によって明らかなであろう。夫がその「告白」を契機として嫉妬と苦悩を深め、ヌムール公と妻との関係を誤解的狀況から確信し、悲嘆と絶望からどっと病いに倒れ、数日後には死ぬという事件ののち、ヌムール公を見てはげしい恋情を感じるとき、彼女は夫を死に至らせた罪の意識、後悔の念をその情念の抑制物にしようとする。そして最後の絵画的場面として、シャルトル侯がとりはからったヌムール公と

クレイヴ夫人との面会の場面がやってくる。彼女はもはや自由の身であり、熱烈に求めてくる相手をまえにし、みずからもまた相手を求めながら、拒絶するのである。

VI 「告白」と「拒絶」における情念の内発性

この、してはならない恋の「告白」と、受けいれてよい恋の「拒絶」とは、『クレイヴの奥方』発表当時サロンの話題をにぎわわしたが、その中心は女主人公のといった態度が正しかったかどうかの、今日から見れば低次元の論点に限られていた。しかしながら、それらの解答が実際的・功利的な観点からなされたとはいえず、とりわけ前者が「異常²³」という評言をやや水準の高い教養人士から受けたことを一つの象徴として、大部分が否定的であったことは、物語りのこのような経緯がよい意味でもわるい意味でも、当時のひとびとの観点からかけはなれたものを含んでいた証拠だったと私は見る。

作中人物における行為の動機として、作者はいく度かくり返して美德や義務や理性をあげるが、これらのものがすでに当時の読者たちをうなずかせる力を失なっていたことは興味深い。もしクレイヴ夫人が真に徳を求め

ていたならば、夫は「告白」するまえにもっと内的な努力をつづけるはずであらう。そして最後の手段として、せっぱつまった状況においてそれを実行するという場面に追いこまれたであらう。しかし実際はどうか？ そのようなせっぱつまった状況は存在せず、選択の自由な状況においてたぶん「意識の気まぐれ」⁽²⁴⁾に引きずられつつその「告白」はおこなわれた。

「拒絶」においてもまた、ちがった意味で作中人物による選択の自由が見いだされる。ついに魂における制御する側の力に勝利させたことは、結果的には女主人公のひいては作品自体の品位を高め悲劇性を高揚するに至ったのであり、その成功はみとめられる。しかしクレイヴ夫人はほんとうに「制御」したのであるか？ 情念を抑制し制御しうるほど彼女は強力ななにかを所有していたのであろうか？ 理性や美徳が心情までも引きずって行けないことは作者自身さえみとめている。⁽²⁵⁾

「告白」についての研究はすでに昨年⁽²⁶⁾の七月号に発表してあるので、重複はできるだけ避けるが、夫が「個々の人間であり、相対的な存在であること——自分を愛している異性であることを忘れてこの告白をおこなったのは、

どのような内的動機によってなにかを問いかける必要がある。夫へのすまなさ・良心の苛責・後悔といった情念が理性・意志によってひきおこされたためであるか？ そうではないことは、告白をしてしまったあとで夫の態度の急変に出会ったさいのクレイヴ夫人の言動がじゅうぶん証しする。彼女が誇り高い態度で、あなたはわたしのまごころだけで満足すべきだ⁽²⁷⁾とか、そうする理由があっていったのではない⁽²⁸⁾といつて、相手の感謝をさえ要求するかに思われるのは、そこに自己愛が存在するからである。「告白」においてクレイヴ夫人の心の内部では、自分を愛して安らぎをえるが、ヌムールを愛して不幸に落ちいるかの⁽²⁹⁾かどうが生ずる。義務と心情、いいかかえれば意志と情念とのたたかいという低い平面的な次元における思想ではなく、情念と自己愛とのたたかいにそれは次元的に変化する。

「自己愛」が自分自身に対する愛であるならば、それはとうぜん情念の一つである。またそれはたとえば「傲慢」「自尊心」などに一つの表現を見せることもあろう。デカルトは自己愛について前述の情念分析論においては触れることがなかったといつてよい。ラ・ロシュフーコ

オは一つの長い省察といくつかの箴言において、自己愛に触れた。彼によれば、自己愛とは自分自身への、自分自身のためのすべてのものへの愛である。その欲望ほどはげしいものはなく、その計画ほど陰險なものはなく、その行為ほど巧みなものはない。そのはげしい願望が全注意をひきつける場では、自己愛はすべてを見、感じ、きき、想像し、疑い、洞察し、などを解く。その情念のおのおのは自己愛に固有な魔術を行使できるとさえいえるほどである。⁽²⁹⁾ 自己愛およびその情念の恐るべき能力はこの長い省察において、一種詩的な散文の形をとって熱烈な調子で吐かれるが、『箴言集』の初版本⁽³⁰⁾ではこの「自己愛」についての省察が、箴言の最初の位置に据えられていたことは軽視できない。

普通の——いや、自己愛に対していえば下位といったらよい情念にも能動性がまったくないとはいえない。喜びが表情を笑わせ、悲しみが涙を流させるような身体表出があり、また喜びが他人に対して親切な言動をさせ、羨望がその対象に侮辱的なことを投げつけさせるような行為がある。しかしよく考えてみると、これらの身体表出や行為は本質的に一種の物理運動とすらいってよい

ものであり、そこになんら自我の主體的なかわりは存在しない。ここは大事な点である。本性的に良質な情念は過剰になれば美徳となり、その他の情念は過剰になれば悪徳であるような表出については、その内発性や能動性を問題にすることは大して意味がない。しかしながらもし、ここに魔術的なものがあったら、本来は、あるいは**真実は悪徳であるはずのものを美徳であるように見せかける、仮面の操作をおこないつつ情念を動かさせる**としたならば、その内発性を無視することはできないであろう。しかもその**仮面の操作は無意識におこなわれている**かもしれないのである。

クレイヴ夫人における「拒絶」も誇り高いという点においては「告白」に劣らない。夫がすでに死んでいる以上、世俗的客観的にはヌムール公の愛を受けいれてもいいようにさしつかえなく、受けいれるもいれないも自由の状況にある。したがって拒絶の理由はどうぞん道徳的・慣習的ではありえず、分析的になるという結果にみちびかれる。拒絶の理由としてクレイヴ夫人は、心の弱みを相手にさらけ出す恥辱、死んだ夫に対する義務、夫の比類ない愛情の認識と後悔、夫を殺したという罪悪感、

安らぎをえたいという気持ち、相手の愛情の誠実さへの不安、夫婦のあいだがらになって生ずべき情熱の終息への予想、一般に恋愛は不幸であるという思想——など、いろいろあげている。どれも少しずつはほんとうであるし、また一つとして自分の恋愛情熱の否定に一つだけでじゅうぶん強力だというものはないということが、少なくともことばのうえからは感じられる。

しかしいちおうこれらの理由が真実を語っているものとして考えれば、それらが大きく二つの群れに分けられるということに気づく。つまり時に関して過去に向かう情念と未来に向かう情念とである。死んだ夫への罪の意識や後悔、失なわれた誠実な愛に対する愛惜など、また義務というものは現在においてこそ存在理由があるもの、もはや死んで過去のものとなった対象についての義務はすでに義務ではなく、この場合情念化しているということがいえる。これらはつまり過去に向かう情念であり、またいっぽう、目のまえの対象に関しての恐れ・不安は時に関して未来に向かう情念であり、それはヌムールという典型的な社交界男の習性への認識と、一般に夫婦における情熱の終息や、恋愛は不幸であるということの認

識がこれからんでいる。さらに、安らぎをえたいという願ひも過去や現在がたとえ原因となっていてとしても、未来に投影する情念である。

現在の情念である恋愛情熱に対して過去の情念は弱いということ、クレイヴ夫人みずから言明しているように思われる。ヌムール公が彼女はすでに過去からまったく自由であることを説得すると、また別の理由をあげるといふふうに見える。ヌムール公との対話中に彼女のあげる理由は循環していて、論理にかなった話しかたになっ
ていないことは、どの読者でも気づくであろう。そこにクレイヴ夫人の、ひたすら不幸から逃走しようとする自己防衛の姿が見られる。恋愛情熱の抑制などをはるかに越え、そこに内から発動する大きな力を感じとらずにはいられない。このような場面において相手を受けられるのは、ごく受動的な姿勢において可能である。受けられるもいれないも選択は自由であるといっても、受けられる方の選択ではほとんど選択はおこなわれていないといってもよい。反対に受けられないという選択において、強力な主体的なかかわりが必要となってくる。未来の情念はクレイヴ夫人のことばのうえで力は弱

いとしても、分析する主体をそこにあらわにすることに
よって、すべてを見、感じ、洞察し、見ぬく自己愛をそ
のドラマにおいて主人公にしていると、私は見えないわけ
にはいかない。

VII 情念の構造と自己愛

この場合、自己愛が未来をよく見、感じ、洞察するこ
はいつでも、未来はまだ実際にはきていないのであるか
ら、その眼が正しかったと証明することはできない。ク
レーヴ夫人がヌムール公の愛を受け入れた結果、彼女が
予想していたのとは反対の、少なくともそれとはちがっ
た状況になる可能性がないとはいえないのだ。

ラ・ロシュフーコオの思想にはもちろんデカルト的な
ものも含まれるが、もっと独自のものがあり、それがこ
のような状況を明らかにしてくれる。つまり、彼はデカ
ルトのような対象重視とは正反対に、主体を重視する態
度をうち出しているのである。彼は自己愛の中心的情念
欲望に関して、欲望が燃え立つのは対象の美によるので
も対象の価値によるのでもなく、実にそれ自身の内発的
な力によるのだ⁽³¹⁾ということを明らかにする。思念の対象

投入という、この近代の感情移入説にも通ずるところの
ある考えかたによれば、クレール夫人が未来に投影させ
ていたその内なる魂の動きがなおいっそうはつきりして
こよう。

デカルトの情念が対象に対して受動的・受容的な場の
うえに成立し、魂におけるより高段階の能力である意志
がそれを抑制し、制御するという自我構造であるのに対
して、パスカルやラ・ロシュフーコオにおいては——系
統立った立論ではないので、そこから矛盾や夾雑物をと
り除いて考察すれば——自己愛そのもの、あるいは自己
愛に属する情念は内発的・能動的であって、もちろんあ
らわな利己的行動をもひきおこすが、全体として美德の
仮面をかぶるところの屈折した行動の原因となるような
構造となっている。

肉体に対する魂のように、「利欲」(Intéret)が自己愛
の中心に座を占めるが、それは自己愛にとっての眼であ
り、耳であり、悟性であり、感覚であり、動きの発動力
である。利欲が一部のひとびとを盲目にするにもかかわ
らず、他のひとびとに光明を与える⁽³²⁾という高度の力を忘
れてはならない。

ラ・ロシニエフ・ニコオの自己愛が、みたくいものを美しく飾り、憐れむべき状況において自尊心を高くかかげようとする衝動をもつことから発し、戦うべき敵とくみし彼らといっしょになつて自分を憎み、自分の滅亡を企て、そのために一心になりまゝな能力をもつことを述べる⁽¹⁵⁾とき、この自己愛が単に情念にかかわつただけに意義をもつ存在ではなく、広大な自我のくらやみにその無意識の領域を伸ばしている存在であることを感じとらざるはならぬ。

だから、情念を通じて発動する力としての自己愛が、デカルト的な意志を欠いた自我構造において、ある意味でじょうぶにそれに代わる抑制力や、その能動性のかなかに含むのである。

- (1) René Lalou: Défense de l'Homme; De Descartes à Proust, 5e édition, Éditions Rieder, 1937
- (2) Préface du Bal du comte d'Orgel, 1924
- (3) H. Chamard et G. Rudler: La couleur historique dans *La Princesse de Clèves*; La documentation sur le XVIIe siècle chez un romancier du XVIIIe. Revue du seizième siècle, 1917
- (4) Stendhal: De l'Amour, Chapitre II, De la nais-

- sance de l'amour, Classiques Garnier, 1959
- (5) René Descartes: Les Passions de l'Âme, Œuvres et Lettres, Bibliothèque de la Pléiade, 1953
- (6) Lalou: op. cit., pp 118, 119
- (7) Descartes: op. cit., Partie I, Article XXVIII
- (8) Ibid., Partie I, Article XXVIII
- (9) Ibid., Partie I, Article XXIX
- (10) Ibid., Partie II, Article LIII
- (11) Ibid., Partie II, Article LXIX
- (12) H. M. Gardiner & Others: Feeling and Emotion, A history of theories, American Book Company, 1937
- 大田隆雄著『他説「一六六四年」』 旺文社
- (13) Descartes: op. cit., Partie II, Article LIII
- (14) Blaise Pascal: Œuvres complètes, Éditions du Seuil, 1963; Note du Discours sur les Passions de l'Amour
- (15) Ibid., 『Qu'une vie est heureuse quand elle commence par l'amour et qu'elle finit par l'ambition!』
- (16) Glossaire de *La Princesse de Clèves*, avec une introduction et des notes historiques d'Émile Magne, Droz, 1950; *Galanterie*……est aussi un terme vague qui désigne (les choses de l'amour)……
- (17) La Rochefoucauld: Réflexions morales, Texte définitif, édition de 1678, Classiques Garnier, 1967;

- 402 : 《Ce qui se trouve le moins dans la galanterie, c'est de l'amour.》
- (21) Descartes : op. cit., Partie III, Articles CCXI, CCXII
- (22) Pascal : op. cit., pp285, 286
- (23) Descartes : Partie III, Article CCXI
- (24) Ibid., Partie I, Article XVII, Partie III, Article CCXII, etc.
- (25) 《Enfin, des années entières s'étant passées, le temps et l'absence ralentirent sa douleur et éteignirent sa passion.》 La Princesse de Clèves, Tome quatrième
- (26) Lettre de Bussy-Rabutin à Madame de Sévigné, 29 juin 1678; Reproduction dans l'Appendice de l'édition d'Albert Cazes, Société d'édition 《Les Belles Lettres》, 1961
- (27) André Beaunier : L'Amie de La Rochefoucauld, Ernest Flammarion, 1927 ; p 196
- (28) 《Mais cette persuasion, qui était un effet de sa raison et de sa vertu, n'entraînait pas son cœur.》 La Princesse de Clèves, Tome quatrième
- (29) 『シロエの奥六』とキナシの「告白」の構造とその「表紙」——橋本義昭 昭和四十四年七月号 論稿
- (30) 《Il me semble que vous devez être content de ma sincérité.》 La Princesse de Clèves, Tome troisième
- (31) 《……qu'aucune raison ne m'obligeait à vous faire.》 Ibid
- (32) La Rochefoucauld : op. cit., Maximes supprimées 1
- (33) Édition de 1665
- (34) La Rochefoucauld : op. cit., Maximes supprimées 1
- (35) Ibid., Maximes posthumes 26
- (36) Ibid., 40
- (37) Ibid., Maximes supprimées 1

(一橋大学講師)